

2018年度しあわせ研究

「障害」のある子の母のための子育てひろば
～そだてるしあわせ～

研究員 前廣美保、矢澤美香子
義永睦子、山本由子



障害を持つことを、英語では「挑戦すべき課題」や、「突出した才能」を人よりも多く与えられていると表現されるようになっている。一方、日本社会においては「障害」は弱く支援が必要なものとみなされる傾向がいまだに強い。母親にとって、通常の育児にも不寛容さを感じがちであるが、障害を持つ子どもを育てる場合、より多くの困難を経験する状況にあると考えられる。

本研究では、障害児を育てている親に注目して、心地よい居場所や仲間、相談などができる子育てひろばを開催し、「そだてるしあわせ」につながる要因を考察する。子育てひろばの開催を通じた実践研究である。

2019年1月、2月、3月に3回武蔵野キャンパス内で子育てひろば「ゆるりゆらり」を開催した。広報は主にメール、WEB掲示板、SNSなどを使用した。1回目・3回目はお茶会とランチ会、2回目は、「しあわせ×ダンス」とのコラボレーション企画として、講師を招き、身体をほぐして、身体を使った関わりを持ったのち、お弁当を食べながらおしゃべりをした。

参加者は、①母親5、子ども1、ボランテ

ィア1、スタッフ3の計10名、②母親5、子ども3、保育5、スタッフ4、講師1の計18名、③母親4、子ども1、保育3、スタッフ3の計11名であった。障害児の母親が保育担当だったこともあり、相互に当事者として会話が弾んでいた。

参加者に簡単なアンケートに回答してもらったところ、95%が「居心地の良さ」を感じており、積極的に情報を求めている母親の参加が多いことと、口コミによる広報が最も有効であることがわかった。同じような立場の母親と出会い、ゆっくりと心を開いて語り合う場が求められていることが、参加者の声から明らかになった。

日頃、他の子どもと比べて、できないことや「普通」じゃないと感じることが多く、社会の規範に当てはめて制限や禁止、否定される苦痛から、「お母さんの身体は硬くて、もう限界。」だと感じられた。

子育てひろばは、力を抜いて、他者を信頼してゆだねること、子ども自身の持つ力、伸びる力を安心して見守ること、自分を認め、ありのままを受け入れることに気づくことができる場である。子どもに「しょうがい」がある母親の「しあわせ」とは、社会に合わせて無理せずとも、その子の持つ力をありのままに認めてくれる場所が増え、社会が変化してゆくことだといえる。

ゆるりゆらりと実践を続けて行きたい。